

(7)陸上動物の予測・評価に関する意見

分類	主な意見の概要	事業者の見解
陸上動物	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロードキルへの対応策が看板設置は不十分で道路脇に小動物が越えられない程度の障害物を設置するのが効率的。</li> </ul>	<p>小動物が越えられない程度の障害物は、移動阻害の原因にもなることから、設置の必要性などについての専門家との調整を含め、関係部局に依頼してまいります。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サシバ、アカハラダカともに石垣島は渡り期中継地として重要であり、記録数は国内最大規模である。しかしながら、両種とも実態調査は平成13年度の3日間のみであり(両種併せて6日間)、十分な期間を調査に当てているとは言い難い(p6-9-26)。</li> <li>・猛禽類の渡りは天候やその年の気候などにより左右され、渡りのピークや通過数を評価するためにはより長期間の調査が必要である。</li> </ul>	<p>サシバ、アカハラダカの渡り調査については、渡りの時期を考慮して調査を実施しています。 準備書p3-121～p125に平成11年度調査結果を記載し、準備書p6-9-26、資料編p資-219～資-228に平成13年度調査結果を記載しました。 両種とも水岳・カタフタ山などへの少数の降り立ちが確認され、ねぐらとして利用されていることを把握しました。サシバについては平成13年10月24日には222個体の事業実施区域上空の通過が確認され、p3-125に示すサシバの飛来コースのうち、東側からの進入を把握しました。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・白保周辺のサンゴ礁海域を利用するシギ・チドリ類の種数、個体数ともに過小評価している。年間を通じた海浜部のラインセンサス調査が不可欠である。</li> </ul>	<p>海浜部における鳥類調査としては、平成13年度に海浜部において4定点で4季調査、平成15年に海浜部においてラインセンサス調査を繁殖期に実施しております。秋・冬の渡来時期に、空港北側の海岸部ではシギ・チドリ類の利用は非常に少ないものとなっており、轟川河口付近の海浜部においては100個体程度を確認いたしました。また、繁殖期には、白保前面海浜部及び轟川河口においてシロチドリ等の繁殖、白保集落近傍においてコアジサシの繁殖を確認しており、シギ・チドリ等の生息、繁殖状況について把握しました。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1999年～2002年のデータを見ても年平均約50件起きている。現空港より、新空港予定地近くの海浜は野鳥数をはるかに多く、陸上のカンムリワシ等を含め、バードストライクの多発が懸念される。</li> </ul>	<p>準備書p6-9-94に記載した航空機との衝突のデータは、現石垣空港のみのデータではなく、他空港を含めたデータであり、評価書において表現を修正します。 航空機との衝突による影響については、海浜部及び陸域での現地調査結果における確認状況を用い、現況の航空機との衝突状況を参考に予測評価を行いました。現石垣空港においては職員が車両で巡回するなどの対策がとられており、新石垣空港においても同様の対策が講じられることから、個体群の減少につながるような頻繁で大規模な衝突が起きるとは考えにくく、衝突個体については数個体程度が減少するものの、重要な鳥類の個体群の維持に影響を及ぼすことはないものと予測しました。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サシバの飛来コースの一部は新空港の離発着コースと明らかに重複しており、野生生物保護の観点・安全性の観点双方で影響評価がなされないのは問題である。</li> </ul>	<p>サシバ、アカハラダカの渡り調査は、既存資料調査結果を準備書p3-121～p125に記載し、既存現地調査結果を準備書p6-9-26、資料編p資-219～資-228に記載しています。 両種とも水岳・カタフタ山などへの少数の降り立ちが確認されました。また、事業実施区域上空ではサシバについて平成13年10月24日に222個体の通過が確認されており、p3-125に示すサシバの飛来コースのうち、東側からの進入を確認することができています。 現石垣空港においては、空港周辺において渡りが確認され、航空機運航の安全に支障がある場合には、運航時間を調整するなどの対応をしており、新石垣空港においても同様の措置がとられることから、影響は小さいものと考えています。</p>